

熱海・湯河原殺人事件

新装版

西村京太郎
Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章	帰ってきた男	7
第二章	死んだ女の詩	29
第三章	本庁の刑事	52
第四章	不安な店開き	73
第五章	盗品	95
第六章	襲撃	116
第七章	記事	137

第八章	失踪	157
第九章	初島	178
第十章	冷たい微笑	198
第十一章	射殺	218
第十二章	犯人 ^{ホシ} を追う	240
第十三章	皆殺し	260
第十四章	決闘	281

熱海・湯河原殺人事件

第一章 帰ってきた男

1

午後六時過ぎのこだまで、一人の男が、あたま熱海に降りた。小さなバッグを一つ持っている。

もう若くはない。といって、老人というにはまだ若い。四十歳丁度といったところか。

身長は一七八センチくらいで、この年代にしては、大きい方だろう。顔が少し青白い。

ゆっくりと階段をおり、通路を通過して、改札

口に出る。

熱海駅の駅前広場は、昔とあまり変わってなかった。土地が狭く、これ以上、広がりようがないからだろう。

みやげものの店が並び、おなじみの温泉まんじゅうの湯気があがっている。

その前は、タクシーのりばや、バスの停車場になっている。

駅前広場から海岸に向って、下り坂の道があり、その両側は、飲食店や、ひものを売る店などが、並ぶ。

男は、その中の一軒、五十年前からある「たけだ」というそば店に入っていた。

注文を取りにきた若い女店員に、男は、

「昔は、ここの鴨南かもなんばんが、おいしかったんだが、今でもうまいかね？」

と、きいた。

「おいしいですよ」

女店員が、ニッコリしている。

「そうか。じゃあ、鴨南のおそばにしよう。大盛りにしてくれ」

と、男は、いった。

注文した鴨南ばんが来るまでの間、男は、煙草たばこをくわえ、火をつけてから、店の中を見廻した。

その視線が、店の奥にいた五十三歳の主人の視線とぶつかった。

男は、軽く手をあげて微笑したが、店の主人の方は、眼を大きくあげ、次の瞬間、あわてて、眼をそらせてしまった。

注文した鴨南ばんが、運ばれてきた。

夕食の時間なので、店には、他に七、八人の

客がいた。

奥から、主人が、女店員を手招きした。

「あそこにいる中年の男のお客だがな。料金は貰もらうな。サービスですと、いいなさい」

と、小声で、いった。

「どうしてですか？」

店に来て間もない女は、首をかしげて、きいた。

「とにかく、いいんだ。サービスだといえはい」

店の主人は早口で、いった。

男は食べおわると、女店員に向って、

「いくらかね？ おいしかった」

「サービスですから、お代は頂きません」

と、女店員は、いわれた通りを、いった。

男の口元に笑いが浮かんだ。

「サービスねえ」

と、いつて、奥に眼をやったが、店主はいつの間にか姿を消していた。

男は、外に出た。

煙草をくわえ、そのまま火をつけずに、歩いて行く。

海岸に出た。

海岸には、若者向きに洒落たしゃれプロムナードが出来ている。男が、眩く。

「変ったな」

男は、ベンチに腰を下し、海を見つめた。

波はなく、沖合いに初島はつしまが見えた。男は、くわえていた煙草に火をつける。

少しずつ、周囲が暗くなっていき、初島も、ただの黒いシルエツトになった。

プロムナードの街灯にも明りがついた。

海岸に並ぶホテルも、山の上のホテルも、明りをつけた。

熱海の夜景は華やかで、美しいという。今夜の夜景も、美しい。

ただ、ところどころに明りのつかないホテルがあつたが、それは、バブルが弾はじけて不景気の波を、もろにかぶって倒産してしまつたのだ。

男の手が、ふいに動いた。

傍に置いてあつたバッグが、奪われそうになつたのだ。

男の右手が相手の腕をつかんだ。

「つまらないことは止める」
と、男は、いった。

「何だよオ」

腕をつかまれた少年が、睨にらんだ。

連れの少年は、ナイフを振りあげた。

「そいつを、おれたちに渡すんだ！」

と、その少年が大声を出した。

男は笑って、つかんでいた少年の手を離した。

「熱海も、物騒になったものだな」

「金を出せ！」

少年の一人はバッグを抱え込んで、八十センチくらいの鉄棒を男に突きつけた。

「そのバッグはやるよ。たいしたものは、入っていない」

男は、両手を開いて少年たちに行った。

「金も出せ！」

少年の一人が、しつこく、いう。

「金は駄目だ。必要だからな」

「やれ！」

と、ナイフを持った方が、けしかけた。

「金を取れ！」

男の眼から明るさが消えて、暗くなっていく。暗いけものの眼になっていく。

少年の一人が、鉄棒をふりあげて、殴りかかってきた。男は、それをかわしもせず、少年の股間を、蹴りあげた。

少年が、呻き声をあげて、うずくまる。鉄棒は、男の頭上を飛んでいった。

男は、もう一人の、ナイフを持った少年を見つめた。

倒れた少年は、起きあがれずに、呻き続けている。

「やるかね？」

男はというと、少年は

「畜生！」

と叫んで、逃げ出した。

男は落ちていた自分のバッグを拾って、歩き

出した。

2

男の暗い眼が、少しずつ、元に戻っていく。賑やかな商店街を抜け、坂を登って行く。その上には、巨大なホテルがあった。

熱海を一望の下に見渡せる場所にあるホテルだ。そのホテルの名前は、

(第一ホテル)

の筈だった。

だが、ホテルの名前は「サンライズ」となっていた。

ホテル・サンライズだ。

男は、ロビーを通り、エレベーターに乗った。

最上階の二十五階には、レストランがある筈だった。

男は、二十五階のボタンを押した。

エレベーターがあがっていく。

二十五階には、間違いなくレストランがあった。だが名前は、レストラン・サンライズに変わっていた。

男は、テーブルに腰を下した。

ウエイトレスが、注文を聞きに来た。

「何になさいますか？」

「サイコロステーキ。それに、サラダをつけてくれ」

と、男は、いった。

ウエイトレスは困って、

「それはメニューにありませんけど」

「おれは食べたいんだ」

「でも——」

「このコック長はまだ柿沼か？」

「そうです。柿沼さんです」

「それなら、サイコロステーキを知ってる筈だ。客が食べたいと、いってると話してくれ」

と、男は、いった。

ウエイトレスが調理場に走って行く。

調理場から五十五、六のコック長が顔を出した。男と眼が合う。

男が、笑った。

五、六分して、男の注文したサイコロステーキとサラダが、運ばれてきた。

「これだよ」

と、男はウエイトレスにいう。

「前と同じように美味うまいといいがな」

「これが、サイコロステーキなんですか？」

パートの若いウエイトレスが無邪気にきく。

「そうだ」

「サイコロみたいに切つてあるだけですな」

「だから食べやすいし、ソースがよくしみ込むんだ」

と、男はいい、ゆつくりと食べ始めた。

食べ終ると、男はレジに行き、黙つて、二千五百円を置いた。

レジの女が、それを受け取つていいかどうか迷っていると、

「わかつているんだよ、サイコロステーキにサラダで二千五百円だ」

と、男は、いった。

「メニューに復活するようにコック長にいつておいてくれ」

男は、エレベーターで、一階ロビーに戻ると、フロントに、

「タクシーを呼んでくれ。湯河原ゆがわらまで行きた

い」

と、いった。

タクシーが来ると、男は乗り込み、

「奥湯河原の青山莊」
せいざんそう

と、運転手に、いった。

3

タクシーは夜の海岸線を、湯河原に向って走る。沖の初島のホテルにも、明りがついている。

熱海の町の明りが遠くなり、代って、夜の暗い海が、広がっていく。

「奥湯河原で、待ち合せですか？」

と、運転手が、きいた。

「どうして？」

「熱海のホテルから、わざわざ、隣りの湯河原へ行くといやあ、向うに可愛い娘を待たせてい

ると、誰でも思いますよ。おまけに、奥湯河原だ」

三十五、六の運転手は、おしゃべりだった。

男は、窓の外に眼をやりながら、

「そうか。湯河原で待ち合せか」

「有名タレントや政治家はよく、湯河原をお忍びに使うんですよ。この前も、有名タレントのNを、奥湯河原まで乗せましたよ。ありゃきつと、噂うわさの女性アナウンサーと、湯河原で会うんだと思っただね」

「——」

「そのNが、泊まったのも奥湯河原の青山莊なんですよ」

「——」

「お客さんも、向うにいい娘を待たせてるんでしょう？」

「くだいな」

「え？」

「少し、黙っているよ。それ以上喋ると殺すぞ」

男は、また暗い眼になった。それをバックミラーで見えて、運転手は怯えたように、黙ってしまった。

タクシーは、「湯河原温泉」の大きな看板を見ながら、左に折れ、川沿いの道を奥湯河原に向って、走る。

湯河原は、熱海に比べると、明りも少なく、静かだった。

有名人の隠れ家といわれるのは、そのためかも知れない。

川沿いの道を、十五、六分も走ると、「奥湯河原」の標識が見えて、道は、急な登りになる。

川も急流になり、滝が現れたりする。温度も一、二度、下った感じだった。

坂道の両側に、いかにも隠れ家といった感じの旅館が並んでいる。

タクシーはその一軒の前に止まった。

青山荘・創業百五十年と書かれている。

男は、タクシーを帰すと、旅館の玄関に入って行った。

4

女将おかみが仲居と出て来たが、男を見て、顔色が変った。

それでも、引き攣つったような笑いを浮かべて、「いらっしやいませ」

と、頭を下げる。

「今夜、泊まりたいんだが、いいかな？」

男は、微笑して見せた。

「どうぞ。桐の間きりがぁいていますから。ご案内して」

と、女将は若い仲居にいった。

渡り廊下の奥が桐の間だった。

男は、籐椅子に腰を下すと、仲居に向つて、

「あとで、酒を持って来てくれ。それと煙草が欲しい」

と、いった。

「煙草は、何にしますか？」

若い仲居がきく。

「決まっているじゃないか」

と、いつてから男は苦笑して、

「君は、新しい仲居さんだな」

「一年前から働いています」

「ケントだ。ケントの白を頼む」

と、男は、いった。

「ケントの白ですな」

「今から、芸者を呼べるかね？」

「電話して、聞いてみますけど」

「雪乃ゆきのという芸者がいい」

仲居は、いったん、退さがつてから、酒と煙草を持って来た。

「雪乃さんは、六年前に、やめたそうです」

と、男に、いった。

「六年前か」

「他の芸者さんなら、今からでも、呼べるそうですけど」

「一人呼んでくれ。誰でもいい」

と、男は、いった。

そのあと、杯さかずきを口に運ぶピッチが急に早くなった。

若い芸者が来た時、テーブルの上には、かなりの空徳利が並んでいた。

「だいぶ、召しあがってるんですね」

と、芸者は笑い、男のくわえている煙草に火をつけた。

「雪乃さんが、ごひいきだったんですね」

「彼女を知ってるのか？」

「会ったことはないんですよ、名前だけ知ってるんです」

「彼女、今何してるんだ？」

「亡くなりましたよ。ご存知ないんですか？」

「いつだ？」

「芸者をやめて、すぐだったと聞いてますよ。

まだ、若いのに、どうしたんだろうって、みんな不思議がったと聞いてます。写真を見ましたけど、きれいな人ですね。あたし、雪乃さんと

同じ置屋なんです」

「君の名前は？」

「小雪です」

「雪乃は、何の病気で死んだんだ？」

「——」

「どうしたんだ？」

「本当に、何も知らないんですか？」

「ここに来るのは、久しぶりだからな」

「雪乃さんですけどね」

と、芸者は、内緒話でもするように、声をひそめて、いった。

「芸者をやめてから、駅前で、小さな飲み屋をやってたんですね。でも、うまくいかなかったんでしょね。店で睡眠薬を飲んで、自殺したって、聞いています。新聞にも、のったそうですよ」

そのあと、小雪は、この不景気で、お茶をひくことが多くなつたとか、置屋のおかあさんが、百万円で買った権利に、全く値がつかなくなつて、愚痴をこぼしているとか、最近は、コンパニオンの方が人気があるので、洋服を着てコンパニオンとして、行くこともあるといったことを、ベラベラと喋つた。

男は、聞いているのかいないのか、柱に背をもたせかけて、眼を閉じていた。

それを、退屈なのかと思つたのか、小雪は、「ごめんなさい。つまらない話ばかりして。お酒が無くなつたから、頼みましようか？」と、声をかけた。

「酒はもういい」

と、男はいつて急に立ち上つた。

「風呂に入る。君も一緒に入るか？」

「入りたいけど、あたし、着付けが出来ないから」

「そうか」

と、男は、いった。

小雪は笑つて、

「ぐじゃぐじゃになつてもいいわ。一緒に入る」

急に、はしゃいだ声を出した。

5

帳場の時計は、十一時を過ぎていた。

「小雪さん、まだ帰つてないみたいね」

女将が、仲居にきいた。

「今、追加のお酒を運んでいったら、小雪さんも、ゆかたになつてました。お客さんと露天に入ったみたいですよ」

若い仲居は、ニツと笑った。

「小雪さん、泊まるつもりかしら？」

「かも知れませんよ」

仲居が、したり顔でいった時、帳場の電話が鳴った。

女将は手で、仲居に、向うへ行けといつてから、受話器を取った。

「ええ。うちへ来てしばらく、泊まるみたい。

今、芸者呼んで、仲良くお酒を呑んでますよ」

と、女将はいった。

「芸者呼んでるのか」

男の声が、いう。

「最初は、雪乃を呼んでくれといったんですけど、六年前にやめたといったら、同じ置屋の小

雪を呼んでます」

「雪乃が自殺したことは知らないのか」

「小雪が、教えたと思いますけどね。そちらでは何かあったんですか？」

「うちのレストランへ来て、食事をしていった」

と、相手はいった。

「それだけなんですか？」

「レストランでは、昔の料理を出せと嫌みをいったらしい」

「ホテルの名前が変わったことは、どう思ってたんでしょうね？」

と、女将はきいた。

「さあ。どう思ったかな。とにかく明日、みんなで会って、相談したい。あんたも来てくれるだろうね」

「そりゃあ、行きますけど——」

「責任は、みんなにあるんだから、必ず、来て

くれないと困るんだよ」

「本田さんや、沢口さんたちも、来るんでしょね？」

「電話して、必ず集まるように、いつてある」

と、相手はいった。

電話を切ったあと、女将は、落ち着けなくて、自分の部屋に入ると、ブランデーを取り出して、呑んだ。

いつもなら、心地よく酔って、眠れるのだが、今夜は、いっこうに、酔えなかった。

(何で、今頃になって——)

と、思う。

あの男は、忘れようとしていて、忘れかけていたのだ。

それなのに、なぜ、今頃になって、現われたのだろう？

昨日まで、全てが上手うまくいつていたのだ。この不景気の中で、この青山荘は、テレビで取り上げられたせいもあってか、経営はうまくいつていた。大型の旅館を目指さずに、落ち着いた、人生の隠れ家的な雰囲気を目標にしたことで成功したと思う。

それが、突然、あの男が現われて、頭上を、暗い雲が、蔽おほってしまったような気がしているのだ。

午前〇時過ぎになって、小雪が、ゆかたの上に、丹前という恰好で現われ、

「すいません。ゆかたと丹前は、あとで返しに来ますから、置屋のかあさんには、黙っていて下さい」

と、女将にいった。

女将は、黙って見送った。

6

翌日は、小雨こさぶだった。そのせいか、急に秋が深くなつた感じがした。

その雨の中を、青山荘の女将の高橋君子は、自分で車を運転して熱海に向つた。

ホテル・サンライズの社長室には、三人の男と一人の女が先に来ていた。

サンライズのオーナーの岡崎は、君子の顔を見るなり、

「奴はどうしているね？」

と、きいた。

「仲居を見にやつたんですけどね。二日酔いで寝ていて、朝食は、いらないと、いったそうです」

と、君子はいった。

「二日酔いか」

「十二時過ぎまで、芸者と吞んでいましたからね」

「それで、少しほっとしたよ」

と、本田がいった。

本田は、熱海市の市会議員で、観光協会の役員もやっていた。

間もなく還暦を迎えるが、議員も、役員もやめる気は、さらさらなかった。

「奴は、なぜ、今頃になって、やって来たのかね？」

沢口が舌打ちをした。

沢口は、弁護士で熱海市内に、法律事務所を持つていた。

「先生に、文句をいいに来たんじゃないですか？」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。